南船北馬
「赤い靴はいて」

作：棚瀬美幸

登場人物：女Ａ　姉（美佳）
　　女Ｂ　妹（恵）
　　女Ｃ　国語中学教師（須田）
　　女Ｄ　音楽中学委教師（森口）
　　女Ｅ　派遣社員（高山）

Prologue

暗闇の中から足音が聞こえる。その足音はまるで踊っているよう。

「踊れ、娘、いつまでも。踊れ、踊れ、好きなだけ。バラ色の頬が青ざめて、雪のように冷たくなるまで」

空中を舞う赤い靴が浮かび上がる。よく見るとそれは、踊りながら階段を上がっていく赤い靴。

Scene・1　姉と妹、実家にて

女ＡとＢの実家の階段。
静かな夜中、階段に座っている女Ｂ（妹）の姿が、階下の廊下灯りによって見えてくる。
廊下を階段に向かって歩いてくる女Ａ（姉）。

女Ａ　だから言ってるでしょう。明日には帰るから・・・・・あ、ごめん、明後日・・・・本当だって、明後日の朝にはこっちを出るから・・・仕方ないじゃない。私だって早く帰りたいわよ・・・・大変なんだから、施設が見つかったって言っても・・・・それだけでもラッキーだったんだから。どれだけ無理したと思ってるのよ・・・・とにかく、お母さんのこと明日には決めるから。それからちゃんと帰る・・・・・うん・・・・・あ、そうだ、ユズハの服、幼稚園の、クリーニング出してるから受け取ってね・・・・カウンター上のコルクボード・・・・じゃあ、お願いね。ユズハには明日の朝、電話する。

女Ａ、電話を切ると、階段に座っている女Ｂの姿に気づく。

女Ａ　（驚いて）ああ・・・なんだ、びっくりした。
女Ｂ　うん、
女Ａ　なんで、そんなとこに座ってるの？
女Ｂ　うん、
女Ａ　いつから座ってたの？　ずっと？

女B　ずっとじゃないけど。
女A　電気点けてもいい？
女B　どうぞ。

女A、廊下の電気を消し、階段の電気を点ける。

女B　眩しい。
女A　眩しいって、どれだけそこにいたのよ。
女B　お姉ちゃんこそ、
女A　私？
女B　どうして廊下で電話してたの？
女A　ああ、
女B　自分の部屋でかければいいじゃない。
女A　嫌よ、あんな部屋。物置じゃない。
女B　でも、思い出のつまった部屋じゃないの？
女A　昔のね。
女B　じゃあ、寝ないの？　そこで。
女A　他のどこにベッドがあるって言うのよ。
女B　なんだ、どうせ寝るんじゃない。
女A　寝るのは仕方ないけど、滞在時間をできるだけ短くしたいの。
女B　リビングで電話すればいいじゃない。
女A　できるわけないでしょう。お母さんがすぐに起きるわよ。
女B　そんなことないと思うけど。
女A　よく怒られたじゃない。小さな声で話してたはずなのに、うるさいって。忘れたの？
女B　覚えてるわよ。でも、今は違うと思うけど。
女A　最近だって怒鳴られたでしょう、お父さんの四十九日の時。あれって確か、ユズハが産まれた年だから、４年前？
女B　もう４歳になるのね。
女A　ええ。リョウタ君なんてもう中学生ぐらいになるんじゃないの？
女B　お母さん、今は起きないわよ。
女A　え？
女B　おかしくなり始めてからは。一度寝たら起きないの。地震があっても何があっても無理ね、あれは。
女A　おかしくって、
女B　お姉ちゃんはほとんど来なかったもんね、この４年間。
女A　そんなことないでしょう？　そりゃあ、恵の方が頻繁に来てくれてるとは思うけど。私だって、
女B　お姉ちゃんだって？
女A　法事の時とか、
女B　そう、そういう何かある時だけね。
女A　お盆とかお正月とか。
女B　それでも年に２回？　お母さんのこと知ってるはずないわよね。
女A　何が言いたいの？
女B　２階の自分の部屋が嫌なら、遠慮せずにリビングを使ったらいいんじゃない？
女A　ありがとう。今度からはそうする。
女B　私の家ではないけど。
女A　恵の家でもあるじゃない。
女B　お姉ちゃんの家でもある。

女A　ねえ、なんでそんな暗いところに座ってたの？　せめて電気点ければいいのに。
女B　驚いた？
女A　気味が悪い。
女B　別に、驚かすつもりでいたわけじゃないから。
女A　当たり前じゃない。
女B　小さい頃、ここでよく遊んだよね。
女A　ここって、階段？
女B　そう。覚えてないの？
女A　覚えてるわよ。
女B　何をしてた？
女A　おままごとでしょう。
女B　ピンポン、正解。
女A　恵、よく覚えてたわね、小さかったのに。私が幼稚園か一年生ぐらいの時じゃない？
女B　ってことは、私は保育園？
女A　保育園かその前。
女B　私もママやりたかったのに、いつも子供かパパだった。
女A　そうだった？
女B　お姉ちゃんがママ役ばっかりとるから。
女A　覚えてない。
女B　でしょうね。
女A　でも、なんで階段でおままごとしてたんだろう。
女B　階段でばっかり。
女A　二階建てや三階建てにしやすいから？
女B　一段毎に部屋にしてたんだよね。ここは洗面所、ここは着替え部屋、ここは寝室って。
女A　よく怒られたわね、お母さんに。お客さんに聞こえるからやめてちょうだい、自分の部屋で遊びなさいって。
女B　お父さんは一緒に遊んでくれたのに、休みの日。
女A　そうだった？
女B　パパ役してくれたの。その時だけは私がママになれた。
女A　そうだったかなあ。
女B　パパがいないと、お姉ちゃんママ役を代わってくれなかったから。
女A　お父さんっ子だったもんね、恵は。
女B　お姉ちゃんはお母さんっ子だったじゃない。
女A　え？
女B　お父さんだけだったから、家の中で私の味方。
女A　お父さん、恵には甘かったから。
女B　ユズハちゃんは、タカヒロさんがみてくれてるの？
女A　私がここに来てる間ってこと？
女B　そう。
女A　もちろん彼だけじゃないけど。
女B　大変なんじゃない？
女A　今は幼稚園行ってるから。それにシッターさんお願いしてるし。
女B　毎日？
女A　私がこっちいる間は。普段は週1だけど。そこまで余裕があるわけじゃないし。
女B　余裕あるわよ、それは。
女A　そんなことないと思うけど。恵のとこは大丈夫なの？
女B　大丈夫って？

女A　リョウタ君とミナミちゃん。自分で学校は行けるんだろうけど、料理とか。５日間ぐらいになるんじゃない？　家空けてから。
女B　もっとよ。
女A　え？
女B　今日で１週間。
女A　そう。
女B　でも、うちでは非日常じゃないから。
女A　え？
女B　私が家を空けること。
女A　それって、
女B　２，３日泊まり込みでこっちに来て、お母さんの面倒みていたことも多かったし。
女A　ああ、
女B　その間、リョウタが洗濯とか、ごはん炊くとか、カレーも作れるようになってくれたから。
女A　さすが中学生。偉いわね。
女B　中学生が偉いわけじゃない。リョウタが頑張ったの。頑張らざるえない環境だったから。
女A　そうね。
女B　そうなの。
女A　ごめんなさい。私ももう少し近くに住んでいれば良かったんだけど。
女B　うちだって近いわけじゃない。
女A　そうね。
女B　電車とバスを乗り継いで、２時間半はかかるの。
女A　２時間半？　そんなにかかる？
女B　お姉ちゃんだって３時間ぐらいでしょう。
女A　新幹線を使えばそうだけど。
女B　寒くなってきた。
女A　え？
女B　やっぱり階段は冷えるわね。
女A　そうね。
女B　もう古いしね、この家も。
女A　４０年近くたってるから。明日も早いんでしょう？
女B　お母さん、朝早いから。寝たら起きないって言ったけど、起きるのは６時前だから。
女A　そんなに早いの？
女B　幾つになると思ってるの？　もう立派な老人よ。明け方に目覚めて、寝てられないみたい。
女A　羨ましい。
女B　羨ましい？
女A　私たちもそろそろ寝ないと。
女B　そうだね、

女A、階段を上がって行こうとする。

女B　先に寝てて。トイレ行ってから寝る。
女A　わかった。おやすみ。
女B　おやすみなさい。

女A、２階へ。一人になる女B。ゆっくりと１階へ。

女B　言い忘れてたけど、お姉ちゃんの部屋のエアコン壊れてるから。もう随分前から。
どうせ使わないと思って直してないからね。

その声は当然聞こえてはいない。女Bにとっても聞かせるつもりはない。

女B　部屋にある荷物、開けてびっくりしないでよ。全部お母さんのものだから。お姉ちゃん、お母さんにそっくりでしょう？　だから、施設に持っていけないものは、お姉ちゃんにあげようと思って、全部。私はお父さんのもの、勝手に選ばせてもらったから。
じゃあね、おやすみなさい。

女B、階段を下がっていく。

Scene・2　教師たち、中学にて

春休みの中学校の階段。
出勤している女C（国語教師）が鍵束を手に階段を上ってくる。
踊り場で立ち止まる女C。踊り場にある窓から外を見る。

女C　ミズキ？　あれ、珍しい。

女D（音楽教師）が鼻歌を歌いながら階段に。

女C　お疲れ様です。
女D　ああ、須田先生。いらしてたんですね。
女C　はい。
女D　２年生の担任は研修じゃなかったんですか？
女C　次は２年の担任じゃないんです。
女D　あ、そうだったんですね、ごめんなさい。つい、持ち上がりかと。
女C　森口先生こそ、春休みなのに。部活ですか？
女D　ちっちゃいんですけど発表会があって、生徒たちがそれに参加したいって。
女C　合唱でしたよね？
女D　合唱部なら音楽教員っぽいんですけど。
女C　あれ、でも、文化祭で森口先生と生徒たちが歌っていたような気が。
女D　それはそうです。
女C　え？
女D　歌ってました。でも、合唱部じゃなくて。合唱部は小谷先生ですから。
女C　ああ、そうですよね。じゃあ、
女D　英語劇です。
女C　あ、そうでしたっけ？
女D　同好会ですけど。
女C　英語劇同好会？
女D　歌ってたのは、ミュージカル曲の抜粋です。
女C　ああ、そういえば、英語の歌でしたよね。
女D　去年できたばかりなので、部員が少ないから。
女C　去年からですか。

女D　英語の先生はいっぱいいらっしゃるじゃないですか。だから、そちらに頼んだ方がいいんじゃないかって言ったんですけど。
女C　森口先生が良かったんでしょうね。
女D　嬉しいことなんですけど、でも、
女C　でも？
女D　あ、気にしないでください。そういえば、須田先生は？
女C　え？
女D　須田先生も部活ですか？
女C　いえ、私は指導要綱を仕上げに。
女D　あれ、提出期限って、
女C　少し伸ばしてもらったんです。事情があって少し有給をいただいてたから。
女D　そうだったんですね、ごめんなさい。1年生の担任じゃなかったので、1年生だった先生方の状況を分かっていなくて。
女C　いっぱいいますもんね、教員も。
女D　あ、4月から一緒によろしくお願いします。
女C　あ、はい。
女D　須田先生も担当になるの初めてなんですよね。私もなんです。向いてなさそうで不安いっぱいなんですけど、ちゃんとやりますんで、お願いします。
女C　えっと、何か一緒でしたっけ？
女D　ほら、あれですよ。田淵先生の。
女C　田淵先生？　体育の？
女D　もちろん。田淵先生のチームになるってことは、今年はちょっと覚悟しないとなと。
女C　田淵先生とチームって、あの、私と森口先生が？
女D　あと、安藤先生もでしたよね、たしか。
女C　もしかして、風紀委員会？
女D　もしかしなくても、風紀委員会です。あの恐るべし。
女C　うそ。
女D　恐るべしとか言っちゃダメですよね、学校内で。田淵先生に怒られちゃう。
女C　4月からですか？
女D　え、まさか須田先生、知らなかったんですか？
女C　ええ。
女D　ああ、有給とってらしたって、
女C　いつの間に、
女D　誰もしたがらないですもんね、風紀委員会は。あ、これは悪口とかじゃなくて、その、大変な仕事だから。
女C　いつ決めたんですか？
女D　3日前ぐらいだったかと。私は会議に出席できていなかったので、知らされただけなんですけど。委員会の役職についてない人でって勝手に振り分けられてて。
女C　よりによって風紀だなんて。
女D　朝早い日がありますもんね。あれ、止めちゃダメなんですかね？　意味ないと思うんですよ。冬なんて寒い日に正門でがたがた震えながら「おはようございます」って。そう思いません？
女C　まあ、
女D　ですよね。じゃあ、須田先生と2人で、朝の挨拶運動廃止案、提出してみませんか？4人の風紀担当の中の2票になるわけだから、あ、でも、やっぱり田淵先生が許してくれないですよね。
女C　誰が決めたか知ってますか？
女D　誰っていうか、会議の中で。

女C　会議の中で、振り分けていった先生というのは、
女D　知りたいですか？
女C　木嶋先生じゃないですか？
女D　詳しくは知らないんですけど、
女C　やっぱり。
女D　木嶋先生は次、学年主任なさるから。
女C　そんなこと（関係ないでしょう）。同意なく決めなくても。
女D　業務命令なんですよ、きっと。そう思わないとやってられませんから。あ、もちろん英語劇は違いますけど。辞めたくても一人顧問なんで、辞めることはできないですけどね。
女C　４月からお願いいたします。
女D　え、あ、はい。こちらこそ。
女C　でも、家庭に事情があって、朝の挨拶運動、毎週の参加は難しいかもしれないんですけど、
女D　ああ、それはお互い様ですし。
女C　お互い様？
女D　風紀委員会の教員が、絶対に毎回でなきゃいけないわけではないでしょうし、交代でとか。
女C　田淵先生は毎回参加されるでしょうけど。
女D　あの先生にとっては趣味なんじゃないですか？
女C　趣味？
女D　なんていうか、その、熱意の押売りっていうか、やってるぞアピール好き？　あ、趣味ではないですね。
女C　森口先生って噂通りですね。
女D　噂？　やだ、どんな噂が回ってるんですか？
女C　明るくて元気な方だって。
女D　本当にそれだけですか？
女C　怒らないでくださいね。
女D　え、何言われてるんですか、私。
女C　怖いもの知らずの天然。
女D　天然？
女C　だから笑顔できついこと言うって。
女D　笑顔できついこと、
女C　あ、気に障りましたか？
女D　それって、失うものがないから、なんでもアケスケに言う天然のバカってことでしょう？
女C　歯に衣着せない、天衣無縫な人ってことで、悪いことじゃないかと。
女D　須田先生の表現だと、悪意がないみたいに聞こえますけど、
女C　悪意なんかないですよ。私もそう噂されてるみたいです。
女D　本当ですか？
女C　ええ。
女D　須田先生がそう仰るなら、
女C　森口先生に、顧問を頼んだ生徒の気持ちがわかります。
女D　え？
女C　風紀委員会、森口先生と一緒で良かったです。よろしくお願いします。
女D　こちらこそよろしくお願いします。

女C、女Dが歩きながら歌っていた鼻歌（「tomorrow」）を歌う。

女D　聞こえてました？
女C　さすが音楽の先生ですね。
女D　音楽の先生だからって、練習しながら歩くなって感じですよね。あーあ、だから天然って言われるんですかね。
女C　アニーですよね？
女D　はい。
女C　思い出しました。文化祭もこの歌でしたね。
女D　そうなんです。
女C　うちの子が、アニーのオーディション受けたいって言い出して驚いたことがあって。
女D　須田先生の娘さんが？
女C　歌が得意ならいざ知らず、贔屓目で聞いても音痴なんです。それなのに、
女D　夢がありますから、アニーには。作品にも、アニー役に憧れることにも。
女C　森口先生も子供の頃（憧れたんですか）？

女D、「tomorrow」のサビの部分を英語で歌う。
女C、拍手する。

女D　子供の頃、ここの部分を何度も口ずさんでいたんです。「暗い寂しさから抜け出せない日は　アゴを上げて笑顔を作ってつぶやくよ　明日になれば太陽は昇る　だから明日まで頑張ろう　何があっても。」
女C　森口先生が？
女D　今の私らしくないでしょう？　自分でもそう思います。アニーに憧れる娘さん、今お幾つなんですか？
女C　ここの生徒たちと一緒で、４月から中３です。
女D　受験生ですか。
女C　既にピリピリしてます。
女D　早くないですか？
女C　娘じゃなくて、私が。
女D　（笑）。
女C　ちょっと家庭で色々あって、それが娘の成績を大きく下げてしまっているので。
女D　どこの生徒さんの家も大変ですね。
女C　ですね。
女D　いつでも言ってくださいね。
女C　え？
女D　朝の挨拶運動、
女C　ああ、
女D　代わりますから。私、子供がいるわけではないので。
女C　ありがとうございます。
女D　それに、結婚もしていませんし。あ、そろそろ行きます。部活戻らないと。
女C　はい。
女D　失礼します。
女C　失礼します。

女D、階段を上がっていく。姿が見えなくなった頃、鼻歌だけが聞こえてくる。

女C　（笑）また（歌ってる）。

女C、再び窓の外に目をやる。校門の辺りで何かを見つけたようだ。

女C　やっぱりダメか。なんとかなってくれるといいんだけど。

女C、階段を上がっていく。

Scene・3　派遣社員と国語教師と妹、老人ホームにて

穏やかな春の老人ホーム。

女E（派遣社員）が階段を下りてくる途中で足を滑らす。

女E　あっ・・・いったぁ、

転んで打ったであろう箇所をさする。

女E　もうやだ。なんでこんなにいっぱいあるのよ。

散らかった着替えやコップなどを集める。

そこに、女Cが階段を上がってくる。

女C　大丈夫ですか？

女E　え、あ、はい。

女C　大きな音がしたので。

女E　ちょっと躓いてしまって、けどもう大丈夫です。

女C　（落ちていた物を拾って）はい。

女E　ありがとうございます。

女C　今日からですか？

女E　え、はい。

女C　荷物手伝いましょうか？

女E　職員の方ですか？

女C　いえ、うちも先週からなんです。

女E　あ、ああ、

女C　うちもすごい荷物で、入所する時大変だったんです。1週間経っても、まだあれが必要これが必要って言われて、未だにてんやわんやです。

女E　大変ですね。

女C　売店で売っているもので事足りるのに、使い慣れた自分の物じゃないと嫌がって。私もコップを取りに行かされました。湯呑ならお気に入りとかあるんでしょうけど、うがい用のコップなんてどれでも一緒なのにって。

女E　これだけじゃないんです。まだまだ車にあって。

女C　部屋狭いのに。入りきるかしら。

女E　入らなければそれでいいんです。そしたら諦めるでしょうから。

女C　そうであればいいですけど、

女E　じゃあ、私は。

女C　少し座りません？

女E　え？

女C　お母さんですか？　入所されたのは。

女E　あ、はい。
女C　お母さんのこと、ここでは施設の方が見てくれてますから。階段ですけど、ちょっと腰かけませんか？
女E　ここに、ですか？
女C　掃除も行き届いていますし。こんな良い天気の日は、この階段に腰かけているご家族も多いそうなんです。
女E　あ、そういえば、
女C　私も初めて見たときは驚いちゃいました。
女E　見学に来た時、
女C　でしょう？　なんで階段なんだろうって、猫じゃあるまいし。
女E　猫？
女C　猫みたいだと思いません？　陽当たりのいい静かな場所を陣取るって。
女E　言われてみれば、
女C　階段は、入居者の方は滅多に使わないから、ここが一番静かなんですって。
女E　ああ、
女C　私も初日、先輩入居者のご家族の方に誘われたんです。「一息ついたら」って。恐らく鬼のような形相だったんでしょうね。
女E　鬼？
女C　実際、ここに来るまで修羅場続きでしたから。
女E　じゃあ私も、
女C　「ここまで来たら落ち着いていいんですよ」って言われて、私、年甲斐もなく泣いちゃいました。でも、介護してたら、修羅場続きで当たり前って思いません？
女E　はい。

女Bが階段を上がってくる。

女B　こんにちは。
女C　こんにちは。
女B　日向ぼっこですか？
女C　はい。
女B　いいですね。
女C　ご一緒にいかがですか？
女B　ちょっと用事があるので。
女C　そうですか。
女B　横、失礼します。
女C　どうぞ。

女B、女Cと女Eの横を通り過ぎていく。
女C、段に腰かける。女Eも仕方なく座る。

女E　お知り合いですか？
女C　そうなんですか？
女E　いえ、私がじゃなくて、
女C　え？
女E　あなたが。
女C　私が？
女E　はい。
女C　あなたと？

女E　あ、違います。私とじゃなくて、さっきの方とあなたが。
女C　いえ。
女E　ああ、

女Cと女E、しばらく無言で座っている。

女E　（立ち上がりながら）私、やっぱり行きます。
女C　どうして？
女E　どうしてって言われても、その、母の荷物を、
女C　後で一緒に手伝いますから。

女E、少しの間そのまま立ち尽くしていたが、意を決して座る。

女C　狸が出るそうですよ。
女E　え？
女C　見てみたいと思いません？
女E　狸、ですか？
女C　珍しいですよね、狸なんて。熊でもイノシシでもなく、
女E　いたちでもなく、
女C　そう、猿でもなく、狸。
女E　狸。
女C　昔話の世界ですよね。
女E　本当ですか？
女C　そう聞きました、先週、ここで。その話が本当なのかどうかは分からないですけど。

女B、階段を下りてくる。

女B　（女Eに）ご一緒してもいいですか？
女E　あ、はい。
女C　どうぞ。
女E　用事は済まれたんですか？
女B　リハビリの内村先生に呼ばれてたんですけど、いらっしゃらなくて。

女B、座る。

女C　うちは、義理の母なんです。
女E　え？
女C　入所しているの。
女E　ああ、
女C　ここに来るまで、同居していて。
女B　須田さんですか？
女C　ええ。
女B　可愛い方ですよね。
女C　外面だけはいいんです、社交的で。
女B　いつも皆さんにニコニコされてて。
女C　でも、家の中は悲惨でした、自分の失態を隠そうとするので。あることないこと、
　全て嫁の私のせい。
女B　他のご家族は、

女C　夫は単身赴任です。自分の母親を私に任せて気楽なもんです。
女B　入れて良かったですね、ここに。
女C　入れてなかったらと思うと。まず仕事は辞めてたと思います。ここに来て、ようやく息ができました。
女B　私もです。
女C　家は崩壊したままですけど。娘は姑と私のことのストレスで、学校に行けなくなってしまって。
女B　お幾つなんですか、娘さん。
女C　4月から中3です。
女B　うちも息子が中2になります。私は仕事辞めちゃいました。同居じゃなかったんですけど、もう無理だなって。契約でしたけど。
女E　そうなんですか？
女B　疲れちゃて。
女C　私も、辞めた方がいいか、今も葛藤しています。
女E　今もですか？
女C　壊れたものを修復する時間がなくて、仕事していると。
女B　（女Eに）今日からですか？　ここ。
女E　はい。
女B　新棟ですか？
女E　はい、C棟です。
女B　ですよね、そうでないと入れないですもんね、こんな田舎なのに。
女E　車がないと来れないですよね。
女C　職員さんも車みたいですし。
女B　（女Eに）ここまでの道、驚きませんでした？
女E　え、
女B　かなり山道でしょう？
女E　ああ、はい。
女B　こんな山奥に施設があるなんて。
女E　ペーパーだったので、不安ですけど。
女B　最初は不安でも、感を取り戻したら、
女C　そうですよ。
女E　運転、もとから得意ではないので。
女C　そのうち慣れますよ。
女E　だといいんですけど。
女B　大丈夫ですって。
女C　どんなことでも、人間、慣れるようにできてますし。
女E　それは（そうなんですけど）、
女C　慣れないとやっていけませんから。
女B　何もかも受け流せたらいいんですけどね。
女E　受け流す？
女B　許せないって思えることさえ、許さないままでも、せめて受け流せたらなって。
女C　強いですよね、そうなれたら。
女E　私は受け流してばっかりです。
女C　あら、素晴らしい。
女E　素晴らしくなんかないです。ちっともそんないいもんじゃなくて、受け止められないんです。
女C　受け止められない？
女E　一つ一つを受け止めていたら、持たないから。だったら流されてしまおうって。

女B　私もそうなりたいです。
女E　え？
女B　流されたいです。一つ一つにつっかからずに。
女E　本当ですか？
女B　ええ、
女E　私は嫌です、そんな自分が。
女B　どうして？

女B（篠原美佳）を呼び出すアナウンスが流れる。

女B　内村先生、戻られたみたい。
女C　みたいですね。
女B　行ってきます。
女C　どうぞ。
女B　（女Eに）またお話きかせてください。
女E　（微笑む）
女B　失礼します。

女B、階段を上がっていく。

女C　あ、猫、
女E　猫ですか？
女C　あ、いえ、猫の毛が、
女E　ついてますか？
女C　え？
女E　どこについてます？　気づかないうちについちゃうんですよね。
女C　猫飼ってらっしゃるんですか？
女E　はい、４匹。
女C　先ほどの方も、
女E　篠原さん？
女C　そう、篠原さん。彼女に猫の毛が。
女E　ああ、つい自分かと。
女C　飼ってたらそう思っちゃいますよね。
女E　えっと、す、
女C　須田です。
女E　すみません。
女C　自己紹介してなかったですもんね。
女E　高山です。須田さんもですか？
女C　え、
女E　猫、
女C　ああ、はい。実家でですけど。
女E　そうなんですね。
女C　４匹も飼ってらっしゃるんですね。
女E　狭いので困ってます。実家で母が飼ってた２匹も預かることになったので。預かるというか、（母のところに）帰っていくことはないんでしょうけど。
女C　賑やかですね、４匹だと。
女E　そうですね。
女C　（立ち上がろうとしながら）荷物、運ぶのお手伝いしますよ。

女E　え、
女C　まだお母様の荷物が車に、
女E　ああ、でも、大丈夫です。
女C　遠慮なさらず。この裏庭の先なんですし、駐車場。
女E　軽いし、すぐですから。
女C　でも、量があるんじゃないんですか？
女E　いえ、本当に。それに、母が嫌がるので初対面の方。
女C　ああ、
女E　だから。
女C　また次会った時でも、何かできることがあったら言ってください。
女E　ありがとうございます。
女C　じゃあ、また。
女E　さようなら。

女C、階段を上がっていく。
裏庭から、猫の鳴声が聞こえてくるように感じる女E。

女E　ミイコ？　ユウキチ？　大丈夫？　喧嘩してないでね。大好きだよ、ミイコ、ユウキチ。

Scene・4　派遣社員と音楽教師、中学にて

女Dがやってくる。

女D　ごめんね、お待たせ。
女E　ああ、うん。
女D　待った？
女E　それほどでも、
女D　ごめんね。応接室、今別の先生が使ってて。さすがに教室もどうかなって。
女E　部外者だもんね、私。
女D　私立じゃないから、それほど関係者以外の出入りに厳しいわけじゃないんだけど。
女E　あ、部外者ではないのか。卒業生なんだから。
女D　何年前の話？
女E　えっと、中学生ってことは１５歳？　ってことは、二十うん年前？
女D　そう、四半世紀以上。
女E　おお。
女D　制服だって変わってるし。校舎だって改築してるし。
女E　でも、卒業生であることには変わりないし。
女D　だけど、昔の卒業生でも今は部外者でしょ？
女E　それはそうだけど。でも、教室入ってみたかったな。
女D　昔とは違うから。このご時勢だから、教室に知らない大人がいたら、生徒もびっくりするだろうし。
女E　そうだよね。私も中学生だったら驚くと思う。
女D　でも、生徒っていうより、先生が驚くかな。親御さんが一人でいることは滅多にないから、声かけざるえないと思う。
女E　親御さん？

女Ｄ　中学生のつもり？
女Ｅ　さすがに１５歳は。
女Ｄ　でしょ。
女Ｅ　なんて声かけるの？
女Ｄ　え、普通に。「どうされたんですか？　誰かお待ちですか？」って。
女Ｅ　やっぱりそうなんだ。
女Ｄ　だって、怪しいじゃない？　学校なのに、親一人って。
女Ｅ　私もそう言われた。
女Ｄ　え？
女Ｅ　どうされたんですか？　って。
女Ｄ　高山が？
女Ｅ　誰かお待ちですか？　って。
女Ｄ　誰に？
女Ｅ　男の人。
女Ｄ　先生？
女Ｅ　なのかなぁ。でも、制服着てなかったし中学生じゃなさそうだから、先生になるのかな？
女Ｄ　その人ジャージ着てた？
女Ｅ　ああ、うん。
女Ｄ　安藤か、
女Ｅ　え？
女Ｄ　最悪。
女Ｅ　あ、ダメだった？
女Ｄ　ダメじゃないけど。
女Ｅ　部外者だから？　不審者ってこと？　もしかして不審者がいるって通報されてたりとか。
女Ｄ　不審者ではないだろうけど、で、なんて答えたの？
女Ｅ　え、
女Ｄ　声かけられて、
女Ｅ　ああ。森口先生を待ってますって。
女Ｄ　で？
女Ｅ　「ああ、そうですか。音楽の森口先生ですよね？　お子さんの部活動か何かですか？」って。
女Ｄ　そりゃ、そう来るでしょうね。
女Ｅ　だから、子供はいませんって。そしたらその人、キョトンってして、足早にどっかに行っちゃった。
女Ｄ　どっか、
女Ｅ　だって、どっちに行ったらどこに行くのか、私知らないから。昔と一緒なら分かるかもしれないけど、あの頃とは違うんでしょう？
女Ｄ　あーあ、
女Ｅ　どうかした？
女Ｄ　面倒なことになったなあ。
女Ｅ　面倒なこと？
女Ｄ　たぶんその先生、今頃私のこと探してる。
女Ｅ　ああ、
女Ｄ　なんで名前言うかなあ。
女Ｅ　でも、そうしないと私ただの不審者じゃない？　生徒でも親でもないのに、学校に来てて、

女D　実際、生徒でも親でもないから。
女E　せめて先生の知り合いでもないと。実際、そうなんだし。
女D　少し前にあったのよ。ある先生が学校に関係ない知り合いを中に入れてて問題になったの。
女E　そうなの？
女D　密会だったみたいで。
女E　のみかい？　騒いでたってこと？　学校で。
女D　え、騒いではないだろうけど。
女E　じゃあ、お酒がダメってこと？　あ、そうか、ここ中学だもんね。アルコール禁止だよね。
女D　お酒飲んでたかどうかは知らないけど。飲んでないでしょう、さすがに。
女E　え、でも、飲み会なのに？　お酒なしって。
女D　飲み会？
女E　学校で飲み会してたって。だから問題になったんじゃ、
女D　密会。
女E　みっかい？
女D　浮気相手と会ってたの、ここで。
女E　学校で？
女D　そう、ある先生が。
女E　学校でってなんかヤラシイ。ってことは、私は森口先生の浮気相手と思われたってこと？
女D　まさか、それはないだろうけど。
女E　良かった。
女D　でも、部外者とこそっと会ってることには間違いないし。
女E　こそっと。
女D　だって、そうでしょう？
女E　ごめん、来ちゃいけなかった？
女D　行けなくはないけど。
女E　はい、これ。（何かを差し出す）
女D　え？
女E　忘れてたでしょう？　一昨日の飲み会で。
女D　一昨日、
女E　密会じゃなくて、
女D　（相手が言う前に）飲み会ね。
女E　同窓会で。
女D　（中を開けて）マフラー？
女E　森口のでしょう？
女D　うん。
女E　席にあったの。先に帰ったじゃない？　すぐにわかった、森口のだって。だから、届けてあげようと思って。
女D　良かったのに。
女E　でも、森口、マフラー好きじゃない。中学の時だって高校の時だって、ずっとマフラー大切にしてて。
女D　そうだったかなあ。
女E　毎年新しいのにしてたでしょう？
女D　よく覚えてるね。
女E　だって、派手だったから。制服は地味なのに、マフラーだけ。
女D　性格は地味なのにって？

女E　性格？　ああ、制服。性格が地味なんて（言ってない）。
女D　どうして？
女E　え？
女D　どうしてわざわざ。
女E　だって、そんなに飲んでなかったのに、忘れていったから可哀想かなって。酔っ払ってたら、いっぱい忘れたりしちゃうけど、そんな飲んでないのに、大切なマフラー忘れるとショックでしょう？
女D　大切なものじゃないし。
女E　でも、マフラーないと困るでしょう？　昔、そう言ってたじゃない。
女D　それは、
女E　要らなかった？
女D　要らないわけじゃないけど。
女E　ごめん、学校まで来たのは謝る。でも、住所聞いてなかったから。だけど、母校で教えてるって自己紹介で喋ってたから。
女D　ああ、
女E　電話番号も知らなかったし。だから、学校に届ければ、誰かが森口に渡してくれるかなって。ほら、別の先生とかが。
女D　ありがとう。
女E　ああ、うん。
女D　わざわざ届けてくれてありがとう。
女E　うん。
女D　じゃあ、
女E　あ、うん。
女D　何？
女E　え？
女D　まだ何か用？
女E　まだ何かって。
女D　まだ私に何か言い足りないことある？　昔みたいに。
女E　昔？
女D　そう、昔。
女E　どういうこと？
女D　昔、よく私のマフラー隠したよね。そして、「マフラーなくすなんてドンくさいよね、森口は」って笑ってたね。
女E　森口？
女D　また笑いに来たの？
女E　違う。
女D　私、あの頃とは違うから。あの頃みたいな生徒じゃなくて、先生なの。
女E　うん、驚いた。森口が先生になってるなんて。
女D　高山は事務やってるって言ってたよね。事務ってアルバイトってこと？
女E　アルバイトではないけど、
女D　派遣？
女E　そう。
女D　中学の頃は、社長になるって言ってたよね。お母さんみたいな女社長になるんだって。
女E　そうだったかなあ。
女D　そうだったじゃない。
女E　覚えてない。
女D　それなのに、派遣なんだ。私は違うから、あの頃とは。

女E　みんな、変わってたもんね。ただのおばさんとおじさんになってたりして。
女D　子供ができると変わるよ。
女E　森口も子供いないでしょう？
女D　いないけど。
女E　不思議だよね。結婚なんかしないって言ってた子が三人の子持ちだったりして。それなのに、早く結婚すると思ってた森口が独身だし。私も早くするつもりだったのに。
女D　私は高山とは違うから。
女E　え？
女D　一緒にしないで。
女E　結婚するの？
女D　あの頃とは違うの。私には、ここに子どもたちがいるの。ここの子どもたちは私を必要としてるの。
女E　でも、先生としてでしょう？
女D　高山は？　仕事ででも子どもたちに必要とされてる？
女E　・・・
女D　マフラー、ありがとう。初めてね。
女E　え？
女D　マフラー返してくれたの。

女D、マフラーを女Eに押し付ける。

女D　あげる。高かったのよ、マフラーとしてはだけど。
女E　要らないわよ。
女D　出ていく時は正門にしてね。他の門、閉まってるかもしれないから。
女E　要らないったら。
女D　あ、あと、門に監視カメラあるから。あなたのことも録画されてるから気を付けて。
女E　録画？
女D　懐かしいからって、寄り道とかしないでよ。そんなことしたら、不審者として通報されちゃうから。
女E　しないわよ。
女D　滞在時間も記録されることになってるの、来客者の。だから、ちゃんと正門から出てね。正門、この校舎の下にある玄関の前だから。
女E　知ってる。
女D　じゃあ。

女E、女Dに近づいて、マフラーを渡す。

女E　やっぱりこれ、森口のだから。私が持ってるわけにはいかない。

女D、拒絶することができず受け取ってしまう。

女E　職場に来てごめんね。仕事、頑張ってね。私も何か、仕事じゃないだろうけど、何かに頑張るから。

女E、階段を足早に下りていく。
取り残される女D。

女D　なんで今ごろ返しに来たのよ。すっかり忘れてたのに。

Scene・5　姉と妹、実家にて

女Aが階段に座っている。
女Bが階段を上がってくる。

女B　（驚いて）やだ・・・お姉ちゃん、
女A　おかえり。
女B　もう来てたの？
女A　うん。
女B　いつから？
女A　ちょっと前。
女B　ちょっとって、
女A　ちょっと前はちょっと前よ。時間なんか計ってないし。
女B　早く着いたなら、お母さんとこ来れば良かったのに。
女A　すれ違うといけないじゃない。
女B　でも、
女A　近いわけじゃないんだから。
女B　それはそうだけど、
女A　家で待ってたら、安全でしょう？　恵だってここに戻って来るんだから。
女B　お母さんに挨拶しても良かったんじゃないの？
女A　明日行くんだし。
女B　それでも、
女A　ここからでも1時間かかるんだから、すれ違ったとしたら、かなりのロスじゃない。
女B　予定より早く着いたんでしょう？　だったらロスも何も、
女A　恵が早く帰りたいかなって思ったのよ。
女B　私が？
女A　リョウタくんとミナミちゃん、待ってるんでしょう？
女B　それはそうだけど、
女A　早く済ませて帰ってあげないと。
女B　私のせいってこと？
女A　え？
女B　私のために、お姉ちゃん、お母さんに会いに行かなかったってこと？
女A　そういう意味じゃないけど。
女B　そういう意味でしょう？
女A　でも、どうせ明日会うんだし。
女B　どうせって、
女A　ごめん、どうせ撤回。でも、明日には行くんだし。わざわざ今日も行かなくても。
　恵が行ってくれてたんだし。
女B　お姉ちゃん、お母さんに会いたくないんだ。
女A　そんなことはないけど。
女B　じゃあ、
女A　じゃあ、恵は会いたいの？
女B　え、
女A　今のお母さんに。毎日会いたい？
女B　病気なんだし、
女A　治らない病気ね。
女B　でも、これ以上悪化しないようにはできるって。
女A　これ以上ボケないように？

女B　リハビリで少しずつ動くようにはなるって。
女A　身体はね、
女B　まだ若いらしいから。
女A　若い？
女B　そう、あの施設では。
女A　ああ、
女B　そう言われた、リハビリの内村先生に。だから頑張ってくださいって。
女A　頑張ってください？
女B　うん、
女A　私たちが？
女B　違う、お母さんが。
女A　ああ、
女B　動かさないと良くならないから。本人はあまりやる気ないみたいだけど。
女A　そう。
女B　でも、少し無理をさせてでも、運動させた方がいいらしいから。
女A　だから？
女B　だから？
女A　家族が頑張れってこと？
女B　そうは言われてないけど。
女A　もしそう言われても、私は頑張らないわよ。
女B　え？
女A　お母さんのことで。
女B　お姉ちゃん？
女A　ねえ、先週、恵、私がお母さんっ子だって言ったじゃない？
女B　そうだった？
女A　そうじゃない？
女B　言ったかどうかは覚えてないけど。でも、お母さんっ子だったのは事実でしょう？
女A　お父さんよりお母さんが好きだった。
女B　でしょう？　お母さんが家を出た後、お姉ちゃん毎晩泣いてたもんね。
女A　聞こえてたんだ。
女B　最初は何の音かわからなかった。グズグズ鼻をすする音が聞こえてて。
女A　古い家は壁薄いから嫌ね。
女B　何年間泣き続けてた？
女A　そんなの分からないわよ。
女B　ずっとでしょう？
女A　ずっと？
女B　お母さんが家に帰ってくるまで、９年間ずっと。
女A　そうだったかなぁ。
女B　私、お母さんをこの家に戻したのは、お姉ちゃんの執念だって思ってた。
女A　執念って、
女B　でも、そうでしょう？
女A　愛情とでも言ってよ。
女B　それなのに、今はお母さんのことそんな風に言うんだ。
女A　私、お母さんに似てるんだよね、
女B　え？
女A　きっと。
女B　うん、
女A　恵はお父さんに似てるって思ってたけど、私はお母さんなんだよね、やっぱり。

女B　そうだね。
女A　顔のつくりとか、体型とか、
女B　うん、最近ますます似てきてる。
女A　性格も。
女B　だね、きっと。
女A　恵は性格もお父さんに似てる。
女B　そう？
女A　守るのよね、家を。
女B　否定はしないけど。
女A　それに、自分も。
女B　自分？
女A　お父さんと一緒。
女B　自分を守る？
女A　お母さんは守らない、家も自分も。
女B　どういうこと？
女A　壊れるものは壊れても仕方ないって言うの？　悪く言えば成り行き任せ。
女B　成り行き任せ？
女A　我慢して守ったりしない。
女B　私とお父さんは守りに入るタイプだって言いたいの？
女A　頑固なのは昔からだもんね、お父さんもそうだった。
女B　だから、お母さんは帰って来れたんでしょう？　帰る家があったから。
女A　でもお母さんは成り行き任せだから。
女B　だから？
女A　私たちが会いに行こうが行かまいが、お母さんにはどっちでもいいことだと思う。
女B　お姉ちゃんがそう思うってことでしょう？
女A　ええ、私がお母さんはそうだと思うって言うだけ。
女B　冷たいんだね、
女A　冷たい？
女B　私はそうは思わない。
女A　じゃあ、
女B　施設に預けるしかなかったけど、だけど、やっぱり本当は近くにいたかった。
女A　綺麗ごとね。
女B　できないことは分かってるけど、
女A　じゃあ、恵がこの家に住む？　ここからお母さんのとこに通う？
女B　私が？
女A　リョウタくんやミナミちゃんと一緒に。
女B　転校させて？
女A　私たちの母校になるじゃない。
女B　仕事はどうするのよ。
女A　ヒロムさん、仕事変えることには抵抗ないんでしょう？
女B　え？
女A　よく転職してるんでしょう？
女B　誰から聞いたの？
女A　お母さん。他に誰かいる？　もちろん今のようになる前だけど、
女B　おかしくなる前ってことは、
女A　おかしくって言い方やめてよ。ボケてはいるけど、狂ってるわけじゃないんだから。
女B　ボケてるの方がひどい表現だと思うけど？
女A　ボケてるのは事実じゃない。痴呆症なんだから。

女B　おかしくないっていうの？　お母さんの頭。
女A　その言い方が嫌いなの。
女B　お姉ちゃん変わってないね。
女A　何が？
女B　お母さんが病気になってから、
女A　うん、
女B　正確にはお父さんが亡くなってから、ヒロム、４年前から仕事変えてないから。
女A　ああ、
女B　だから、そんな簡単に引っ越しとかできないの。
女A　てっきり、
女B　離婚してるとでも思った？
女A　そこまでは思ってないけど、ヒロムさんのこと話題に出ないから。
女B　身内のことをベラベラ喋ることないでしょう？
女A　お母さんみたいに？
女B　お姉ちゃんみたいに。
女A　あら、
女B　だから、こっちに住むことはできないの、私も。
女A　じゃあ、しょうがないわね。
女B　しょうがない、
女A　だってしょうがないでしょう？
女B　お姉ちゃんの部屋、片づけておいてね。
女A　私の部屋？
女B　要るものと要らないもの、分けといてよ。
女A　ああ、
女B　せめて自分の部屋ぐらいは、
女A　他の部屋も手伝うわよ。こっちにいる間は。
女B　どうせしないくせに。
女A　そんなことないわよ。
女B　荷物まとめてくる。
女A　え？
女B　自分の。早く帰らせてくれようとしたんじゃないの？
女A　ああ、どうぞ。
女B　うん。

女B、階段を上がっていこうとする。

女A　恵、
女B　何？
女A　どうしてもっと来てって言わなかったの？
女B　え？
女A　ここ、お母さんとここに。
女B　言ったら来た？
女A　それは分からないけど、
女B　でしょう？
女A　でも、ユズハが赤ちゃんの頃なら抱っこしてとか。
女B　さっきも言ったけど、
女A　さっき？
女B　泣いてたからお姉ちゃん、ずっと。

女A　だから？
女B　でも、私は泣けなかった。
女A　そうだったんだ。
女B　だから、
女A　だから？
女B　そこの違いかな。

女B、階段を上がっていく。
女A、女Bが階段を上がりきったのを見届ける。

女A　お母さんとお父さん、どっちが先に好きになったか、恵、聞いたことある？　私、昔、お母さんに聞いたの。どっちからだと思う？　正解はね、お母さん。意外でしょう？　子どもとしてはお父さんかなって思うもん。でも逆なの、お母さんから猛アプローチしたんだって。4歳か5歳で小さかったけど、とっても驚いたからよく覚えてる。お母さんが帰って来てからは、そんなこと話すこともなかったから。恵は何か聞いてるの？　いつか恵に聞いてみたいと思ってたの、お母さんが戻って来てからのこの家のこと。

Scene・6　女にとっての母親

女Aが階段を走って来る。

女A　お母さん、待って。待ってってば、お母さん。

舞台上には、女B，C，D，Eの姿が。

女A　ねえ、ここにいればいいの？　ここで待ってればいいの？　絶対に迎えにきてね。できるだけ早くね。

舞台上の女たちが、「お母さん」と囁く。

女A　一緒にいた人、誰？　お仕事一緒にしている人？　なんで学校休みなのに、男の人と一緒に学校に来るの？　お話しって何？　何のお話するの？　それに、どうして話してることが内緒なの？　お仕事なのに内緒なの？　お仕事してることが内緒なの？　でも、学校に美佳と行くって、出かけるときお父さんと恵に言ってたよね。ねえ、お母さん、一人だと寂しいよ。早く迎えにきて。おうちに帰りたい。お母さんと一緒に帰りたいの。お母さん。

高らかな笑い声。
どこからか靴音が聞こえる。それはステップを踏んでいるようである。

暗転。

Scene・7　姉と派遣社員と国語教師、老人ホームにて

女Cが階段に座っている。
そこに、女Eが猫用キャリーバックを持ってやって来る。

女E　こんにちは。
女C　こんにちは。
女E　この間はどうも。
女C　こちらこそ。猫ですか？
女E　あ、はい。
女C　４匹飼ってらっしゃるっていう、
女E　はい、そのうちの１匹です。
女C　お母さんの猫ちゃん？　猫ちゃんもご面会に？
女E　いえ、母ではなく、私の方の（猫）。動物病院に連れて行った足で、ここに来たので。
女C　病気か何か？
女E　毛をむしってしまって、ストレスみたいで。
女C　まあ、可哀想に。
女E　傷自体は大したことはないんですけど。
女C　猫は敏感ですもんね、環境の変化。
女E　ペトラとクルミア、あ、母の猫の名前です。引っ越してきたのは、その２匹の方なのに、誰に似たのか逞しくて。
女C　こちらの猫ちゃんのお名前は？
女E　ミイコです。
女C　ミイコちゃん、
女E　でも、なんか様子がおかしくて。病院に行った後からなんですけど。
女C　あら、
女E　吐いちゃって。食欲もないみたいで。
女C　車酔いか何かなのかしら。山道だから、ここ。
女E　ですかねえ。無理させちゃったから。
女C　でも、うちの実家の猫は、名古屋までも往復してますし。
女E　名古屋ですか？　ここから？
女C　ええ、片道、車で２時間はかかるのに。
女E　猫と２時間、
女C　うちの母の希望で。
女E　猫、大丈夫なんですか？
女C　大丈夫な時もあるようですけど、やっぱりたまに車酔いはしてるみたい。吐いてしまう時もあって。

女Aがやって来る。

女C　こんにちは。
女A　え、ああ、こんにちは。
女E　こんにちは。
女A　こんにちは。
女C　はじめまして。
女A　こちらこそ、はじめまして。あの、何されてるんですか？
女C　日向ぼっこ？

女Eのキャリーバックから、猫の鳴声がする。

女A　猫の日向ぼっこ？
女E　ああ、はい。
女C　猫もですけど、私たちも。
女A　階段で、ですか？
女C　気持ちいいですよ。
女A　喫茶室か何か、この施設には（あるんですか？）、
女C　自動販売機はありますけど、喫茶室は（ないですね）、
女A　ああ、
女E　食堂なら、
女A　いえ、食堂は（結構です）、
女E　入居者の方のくつろぎスペースになってるみたいで、
女A　はい。
女C　どうです？　ご一緒に。
女A　はあ、
女C　もちろん無理にとは、

女A、周りを見渡し悩んでいる。

女E　お客様が帰られるまででも、
女A　え？
女E　あ、すみません。
女A　お客様？
女E　えっと、
女A　聞こえてました？
女E　すみません。
女A　いえ、
女E　なんだか、
女A　こちらこそ、
女E　こっちこそ、その余計なことを、
女A　すみません。
女E　そんな、
女A　座ってもいいですか？
女E　え、
女A　ここ。
女E　ああ、はい。
女C　どうぞ。

女A、階段に腰かける。

女A　お騒がせしてすみませんでした。
女E　いえ、そんなこと、
女A　驚いてしまって、
女E　はい、
女A　というか、取り乱してしまって、
女E　いえ、
女A　お隣の方ですか？

女E　隣ではないんですけど、同じ階の、
女A　そんなに聞こえてたんですね。
女E　そうじゃなくて、その、たまたま前を通ってしまったので、
女A　ああ、
女E　タイミング悪くてすみません。
女A　そんな謝ることじゃあ、
女E　はい、
女A　ええ。
女E　何か、買ってきましょうか？
女A　え？
女C　じゃあ、私が。
女E　飲み物。自動販売機ですけど。
女A　いえ。
女E　そうですか。
女A　絵の、先生だったんです。
女E　え？
女A　絵画教室。
女E　あ、はい。
女A　母の。
女E　ああ、
女A　私も少し習ってたらしいんです。覚えてないんですけど。

女C、その場を離れていく。

女A　うっすらとした記憶はあるんです。5歳ぐらいだったと思うんですけど、学校の美術室のように工作机が島になってる部屋で、画用紙を前に何か描いたことがあるような。
女E　習い事で絵画教室、人気でしたもんね。
女A　でも、小学校入る前だったし、教室に入るまではいってなかったと思うんです。母に連れられてただけなんじゃないかと。母のように絵が上手になりたいと思ってたんですけど、才能がなかったんでしょうね、私には。ずっと絵は苦手でした。
女E　お部屋に飾っている絵、
女A　ああ、病室の。
女E　病室というか、
女A　あ、病院じゃないですね。
女E　お母さんが描かれたんですか？
女A　あの風景画、
女E　手を繋いでいる子供の、
女A　見えたんですね。
女E　あ、すみません。でも、さっきの揉めてらっしゃる時ではなく、前に部屋に入らせてもらったことがあって。
女A　いえ、そうじゃなくて。子供が。小さくしか描かれてないのに。ちゃんと人間だって、それも子どもだってわかったんですね。
女E　はい。あれ、女の子ですよね？　2人の。
女A　みたいです。
女E　良い絵だなって思って見てました。感情に訴えかけるっていうか、
女A　あの手を繋いでいる2人、何をしているか分かりますか？
女E　何を、
女A　分からないですよね。

女E　帰り道とか、お出かけした。
女A　逃げているんですって。
女E　逃げる？
女A　踊りながら。
女E　踊り、ああ、だから、真っ直ぐじゃなかったんですね。
女A　気味が悪いでしょう？
女E　そうですか？
女A　踊りながら逃げていく子供なんて。
女E　最近描かれたものなんですか？
女A　どうなんでしょう。よく知らないですけど、たぶん違うんだと思います。自宅に宅急便で送られて来たのは最近だったようなんですけど。
女E　宅急便、
女A　でも、母が描いた絵に間違いはないんです。サインがありましたから。妹が飾ろうって言い出したんです。
女E　絵か何かがないと殺風景ですもんね。
女A　私は反対だったんです。
女E　え、
女A　絵を飾るの。
女E　でも、素敵な絵ですし。ご自身で描かれたものなら記憶療法にも役立つかも、
女A　今更いいんです。

女Eの猫が弱々しく鳴く。

女A　思い出して欲しくないんです。「揉めてた」っておっしゃいましたよね。
女E　あ、
女A　部屋で。
女E　すみません。
女A　事実ですから。あの人に来て欲しくなかったんです。
女E　面会は自由ですもんね、この施設。
女A　ここにいることを教えるなんて思ってなかったので。
女E　ご本人が？
女A　母にはもう、
女E　ああ、
女A　妹です。
女E　よほど長く通われた教室だったんですね。
女A　母の恋人なんです。
女E　え、
女A　正確には、恋人だった人。
女E　恋人、
女A　私たちよりあの人を選んだ時期もあったぐらい、母にとっては大切な人だったんでしょうね。

と言って、女A少し笑う。

女A　でもね、もう覚えてないんです。思い出せないみたいで、彼が誰か。

女C、電話をしながら階段を下りてくる。

女C　わかりました、すぐに参ります。今、母のところなので３０分ぐらいはかかるかと・・・・それで、娘は今・・・・ああ・・・・そうですか・・・・はい・・・・じゃあ、急いで。失礼します。
女A　大丈夫ですか？
女C　ちょっと娘が。
女E　ああ、
女C　怪我をしてしまったみたいで。
女E　学校でですか？
女C　はい、勤務先の。
女A　お気をつけて。

女C、お辞儀をして足早に去っていく。

女A　小学校なんですかねぇ。
女E　たしか、中３って言ってました。あ、でも、
女A　でも？
女E　登校拒否って言ってたような気が、
女A　ああ、だから（勤務先）。学校の先生なんですね。
女E　え、私ですか？
女A　あ、そ　じゃなくて、
女E　え？
女A　さきほどの、
女E　ああ、須田さん。
女A　中学生の娘さんがいるようには見えないのに。
女E　分からないもんですね。
女A　お子さんは？
女E　いえ、私は、
女A　そうでしたか、
女E　いつかは欲しいと思ってるんですけど、どうなるんでしょう。
女A　縁ですから、子供も。
女E　結婚もまだなので。彼氏とも別れたところで。
女A　見つかるといいですね、早く、素敵な人。
女E　え、はい。
女A　私、飲み物買ってきます。喉乾いちゃって、揉めてたら。
女E　あ、はい。
女A　失礼します。

女A、階段を上がっていく。

女E　見つかるといいですね、早く、か。

女E、猫を抱えて出ていく。

ＳＣＥＮＥ・８

女Aが階段に座っている。

女Bがやって来る。
女Aと女B。

女B　また座ってる。
女A　おかえり。
女B　ただいま。
女A　早かったわね。
女B　ただいまっていうか、
女A　ありがとう、呼び出してごめんなさい。
女B　何？　あまり時間ないの。
女A　うん、
女B　子供たちの学校が終わるまでには帰らないといけないから。
女A　私も。
女B　え？
女A　早く帰らないといけない。
女B　でも、呼びつけたのはお姉ちゃんでしょう？
女A　そんなに家空けられないから。
女B　じゃあ、
女A　シッターさん既に延長入ってるし。
女B　電話じゃダメだったの？
女A　電話では話したくなかったの。
女B　勝手ね。で、何？
女A　わかってるんでしょう？
女B　え、わからないわよ。
女A　わかってるくせに。
女B　何の話？
女A　来たわ。
女B　え？
女A　施設に。恵が呼んだんでしょう？
女B　私が？
女A　妹さんに教えてもらったって。
女B　ああ、（あの人のことね、）

女Dが踊り場にいる。
女Cが階段を上がってくる。
女Cと女D。

女C　すみません。ご迷惑をお掛けしてしまって。
女D　いえ。それより大丈夫でしたか？
女C　はい、今は落ち着いているみたいです。
女D　良かったですね。
女C　森口先生に見つけていただけて助かりました。
女D　たまたまですし。
女C　ここだったんですよね？
女D　はい、部室に行こうと思って上がってきたら、
女C　うちの娘が、
女D　私服の女の子が倒れていたので。
女C　すみません。

女Ｄ　最初はうちの生徒かと思ったんですけど、話を聞いてみると、須田先生の娘さんだって。制服じゃないので、あれっとは思ったんですけど。
女Ｃ　ご迷惑をお掛けしてしまって。
女Ｄ　病院に連れて行った方がいいかと思ったんですが、本人が嫌がってたので、まず須田先生にと。
女Ｃ　ありがとうございます。
女Ｄ　娘さんの足、大丈夫でした？
女Ｃ　足の怪我は擦り傷程度で。それより、
女Ｄ　気持ちですか？
女Ｃ　はい、パニックになってたようで。
女Ｄ　かなり呼吸が乱れていたから。
女Ｃ　森口先生にはご迷惑を。
女Ｄ　でも、なんで娘さんがうちの学校に、
女Ｃ　えっと、
女Ｄ　あ、話したくないんならいいんです。
女Ｃ　そういうわけじゃないんですが、
女Ｄ　何か事情があるんですね、皆さん色々ありますし。
女Ｃ　登校拒否なんです。
女Ｄ　え？
女Ｃ　ここ一年ぐらい、まともに学校に行けてなくて。
女Ｄ　ああ、
女Ｃ　だから、新学期に向けてまずは学校に慣れられるように、ここに来るよう練習させてたんです。
女Ｄ　家、お近くなんですか？
女Ｃ　隣の学区なんです、同じ市内で。
女Ｄ　そうなんですね。
女Ｃ　最初は校門まで、次は職員室までって段階を踏んで、最後は教室まで入れることを目標にしてたんですが、
女Ｄ　親のいない時に来ちゃったと、
女Ｃ　校門までしか来れたことはなかったんです。職員室にいる私のところに荷物を届けることもできなかったんですけど、
女Ｄ　娘さん、頑張りましたね。
女Ｃ　え？
女Ｄ　校門を抜けて、職員室も通り過ぎて、階段まで来たんですから。この上は教室です。
女Ｃ　でも、
女Ｄ　でも？
女Ｃ　パニックを起こしてしまって、こんなことになるぐらいなら、
女Ｄ　須田先生は完璧主義なんですね。
女Ｃ　え？
女Ｄ　なんでも１００％じゃないと許せないんじゃないですか？
女Ｃ　そこまでは、
女Ｄ　ほどほどで妥協することができない、自分にも相手にも。
女Ｃ　そうなんですかねえ。
女Ｄ　息が詰まる。
女Ｃ　え？
女Ｄ　正直、息が詰まるんです。

女Ｅが、紙袋を抱えてやって来る。

女Cと女E。

女E　これ、もらってもらえませんか？
女C　え？
女E　全部じゃなくても。もし嫌じゃなければ、何枚かだけでも。母が注文したものなんです。捨てようと思ったんですけど、どうしてもできなくて。まだ新品なんです。
女C　お母様が？
女E　いつの間にか、こんなにも。通販で大量に注文してたみたいなんです、何回も何回も。
女C　ショーツ？
女E　はい。ヘルパーさんが届いた宅急便を毎回開けて、片づけてくれてたみたいなんです。それにしてもなんでこんなに。
女C　分からなくなるとは言っても、
女E　こんな小さくて派手なの、もう履くことなんかないのに。
女C　欲しくなると止められなかったんでしょうね。
女E　なんか恥ずかしいです、母の頭の中を考えると。こんなものを欲しがるなんて。
女C　物欲は元気な証拠だから。
女E　だからって、こんなパンツばかり。私だってこんな女っぽいのなんか履かないのに。
女C　うちもありました。
女E　え、
女C　うちはからくり時計でしたけど、大きな。
女E　からくり時計？
女C　人形が出てくる。返品がきかなくなるまで、押し入れで眠ってて。買ったまま忘れてしまってたんでしょうね。娘が見つけるまでずっと押し入れの中。
女E　押し入れ、
女C　納品書の値段を見て驚きました。どうやって姑が支払ったのか分からないんですけど。
女E　うちはカードでした。
女C　カードは怖いですよね。
女E　早く止めておけば良かったんでしょうけど、
女C　私は早々と姑のカード、ハサミで切っちゃいました、バキバキバキッと。何が原因だったか忘れちゃいましたけど、こんな悪魔のカードを悪魔に持たせるわけにはいかないって。
女E　悪魔、
女C　悪魔の方が可愛げあるかも。からくり時計なんて少女趣味でしょう？　うちの母では考えられない。
女E　・・・・
女C　あ、そうだ、猫ちゃん、ミイコちゃんでしたっけ、その後体調は、
女E　ああ、
女C　元気になりました？
女E　亡くなりました。
女C　え、
女E　次の日に病院に連れて行ったんですが、手遅れで。

女Aと女B。

女A　なんで、
女B　会ったんだ。

女A　なんでお母さんが入所したことをあの人に教えたの？
女B　ダメだった？
女A　わざわざ言うことないじゃない。
女B　どうして？
女A　どうしてって、
女B　あの人にも知る権利があると思ったから。
女A　知る権利？
女B　お父さんももういないんだし。
女A　だからって、
女B　９年間も一緒にいたのよ。
女A　そんなの関係ないでしょう。
女B　お姉ちゃんより長く一緒に暮らしてたの、９年って言ったら。
女A　もしそうだとしても、
女B　もしじゃない、事実。
女A　それでも、
女B　後悔するだろうなって思ったから。
女A　後悔？
女B　そうでしょう？
女A　誰が？　お母さんが後悔するって言うの？
女B　お母さんじゃなくて、
女A　じゃあ、
女B　私たちが、
女A　私たち？　私と恵が？
女B　いや、私かな。
女A　なんで恵が後悔するのよ。
女B　お母さんが電話したらしいから。
女A　嘘。お母さんが？　いつ、
女B　いろんな人に電話してたみたい、おかしくなってから。アドレス帳を手当たり次第。
女A　アドレス帳？
女B　お母さん、手書きのアドレス帳持ってたのね、知らなかった。片づけてたら出てきたの。それを置いてたら見つけたみたい。
女A　お母さんが？
女B　まともに話が通じたのかどうか分からないけど。何人かから、「お母さんから電話があったんですが」って掛かってきたことがあったから、私がここにいる時。
女A　そんなこと、
女B　あの人にも掛けたみたいね。
女A　お母さんから？
女B　そうみたい。
女A　２０年以上前なのに、なんで今さら、
女B　そんなの知らないわよ。本人に聞いてみたら？
女A　聞いても答えられないじゃない。
女B　それで絵が届いたの。お姉ちゃんも見たでしょう？　施設に飾ってるあの絵。
女A　聞いた。
女B　え？
女A　絵を送ったって。
女B　そう。
女A　恵が電話したんでしょう？
女B　だって、お礼ぐらい言わないと、

女A　なんで施設に入ったことまで言うのよ。
女B　心配してたから。
女A　だからって、施設の名前まで言わなくても。それじゃあ、まるで面会に来てほしがってるみたいじゃない。
女B　来てほしいなんて言ってない。
女A　でも、言ってるのと同じじゃない。
女B　来るとは思わなかったから。
女A　嘘。

女Cと女D。

女D　うちの父親もそういう人でした。
女C　森口先生？
女D　昔堅気の男で、父ができてほしいことを私ができないと、すぐに手をあげました。頑張って父の思いに応えようとするんですが、どうしてもできなくて。母は何もうるさく言わない人でした。今で言えば放任主義だったんでしょうね。父がどれだけ私を叱っていても、気にならないようで。悪い母ではなかったんですけど。
女C　森口先生の父親みたいってことですか、私が。
女D　期待しすぎなんですよ、娘さんに。
女C　子どもに期待しない親はいません。
女D　うちの母は、私に過剰な期待はしませんでした。
女C　森口先生はお子さんがいらっしゃらないから、だから、
女D　だから？
女C　いえ、
女D　だからなんなんですか？　子どもがいないから分からないって言いたいんですか？
女C　禁句ですよね。
女D　ノンママハラスメントって言うんですよね、最近は。
女C　すみません。
女D　教育現場では多いですよね、昔っから。
女C　娘のことを助けてもいただいたのに。
女D　自分の家族のことを職場で持ち出す人が嫌いなんです、私。
女C　自分の家族のこと、
女D　皆それぞれ事情があるんです。職場で特に学校で、子供の話なんかしないでほしい。私はそう思っています。
女C　すみません。
女D　娘さん、ほどほどに見守ってあげてください。部活に行ってきます。相当遅れてしまっているので。
女C　あ、はい。
女D　また、風紀委員会で。
女C　そうですね。今日は娘のこと、
女D　そのことは気にしないでください。
女C　ありがとうございました。

女Cと女E。

女E　ユリ中毒だったみたいです。
女C　ユリ、

女E　母の部屋にお見舞いのユリの花が来てたんです。その花瓶の水を飲ませてしまったんだろうと、私が席を外しているうちに。
女C　なんてこと、
女E　母も猫を飼っていたから、ユリが猛毒だって知っていたはずなんです。それなのに、
女C　お母様もショックだったでしょうね。
女E　母は何も分かっていません。猫が水を欲しそうに鳴いてたから、近くにあった水をあげた。ただそれだけなんです、きっと。
女C　そうでしたか、それは大変でしたね。
女E　今の母を責めてはいけないと分かってはいるんです。でも、
女C　悲しいですよね、
女E　分かってはいても、やっぱりミイコがかわいそうで、
女C　ええ、
女E　母が水さえあげなければって、水道の水をあげてくれていればって、
女C　わかります。
女E　もしあの時、私がミイコを置いて外出しなければ、ミイコを連れてオムツを買いに行っていれば、
女C　高山さんは何も悪くないんですから、
女E　部屋にユリの花さえなければ、お見舞いに来た花がユリでなかったならば、あの日ミイコを連れて来なければ、家に置いてきてさえいれば、ミイコを病院に連れて行かずにすめば、ペトラとクルミアさえ家に来なければ、母が施設に入っていなければ、そもそも母が認知症にならなければ、
女C　高山さん、
女E　母が私のお母さんでさえなければ、
女C　高山さん、
女E　私のお母さんでさえなければ、ミイコは死ななくて良かったのにって。

女Dと女E。

女E　森口、
女D　ああ、
女E　うん、
女D　また来たんだ。
女E　うん、
女D　あれ、インターホン鳴らした？
女E　ごめん、
女D　じゃあ、事務室も職員室も？
女E　素通り。
女D　だから、放送なかったんだ。
女E　ごめん、
女D　うん、で、何の用？
女E　用っていうか、
女D　何？
女E　用事ってほどじゃないんだけど、
女D　でも、何かあるから来たんでしょう？

女Aと女B。

女B　嘘？

女A　面会は自由にできるところだって言ったんでしょう？
女B　社交辞令よ。本当に来るなんて思わないから。
女A　来てもいいって思ったから、言ったんじゃないの？
女B　どうだろう、でももう今なら、
女A　今なら？
女B　長くないんだから、
女A　関係ないでしょう。それに、お母さんリハビリで良くなってるって、
女B　悪くならないっていうのと良くなるは違う。
女A　恵は、お母さんに会わせたかったの？　あの人と。
女B　今会わないともう会えないのよ。
女A　会わなくていいじゃない。
女B　それは私たちが決めることじゃないでしょう？
女A　私が嫌がるってわかっててしたんでしょう？
女B　お姉ちゃんが（嫌がる）？
女A　だから、内緒であの人に教えたんでしょう？　そうじゃなかったら、絵が送られてきた時に、そのこと私に話してくれてもいいじゃない。
女B　ほとんどこっちに来てなかったじゃない、自分の子育てばっかりで。
女A　それでも、
女B　高齢出産の一人娘だもんね、可愛いのは当然だよね。
女A　それでも、電話する前に私に知らせてくれても、
女B　私だってお母さんの娘なの。
女A　当たり前でしょう？
女B　その当たり前が当たり前に感じられなかった、お姉ちゃんと一緒にいると。
女A　あんたって子は、昔から何考えてるかわかんない子で、強情なんだから。
女B　お姉ちゃんとお母さんはわかりやすかったもんね。感情を抑えたり隠したりができないから。私はお姉ちゃんとは違うから。そんな簡単に気持ちをまとめられないの。
女A　私だって、
女B　でも、一つだけ、
女A　一つだけ？
女B　一つだけ今回のことで、お姉ちゃんとお母さんに伝えたかったことがあるとすれば、
女A　何、
女B　お母さんの子供は、お姉ちゃんだけじゃないってこと。

女Dと女E。

女D　何？
女E　ちょっと話がしたくて、
女D　私と？
女E　ダメかな？
女D　内容によるけど、
女E　内容っていう内容もないんだけど、
女D　ないの？
女E　うん、
女D　それを私と？
女E　変かな？　変だよね、
女D　うん、
女E　猫が死んだの。
女D　猫？

女Ｅ　そう、だから、
女Ｄ　だから？
女Ｅ　話がしたくて、森口と。
女Ｄ　私、猫飼ってないよ。飼ったこともないし。
女Ｅ　それでも、
女Ｄ　変なの。
女Ｅ　うん、
女Ｄ　変だって。
女Ｅ　うん。

どこからか靴音が聞こえる。靴音を探す女たち。
そこに、赤子の泣き声が重なる。大人であった女たちの顔が幼子に戻っていく。
「お母さん」と呼ぶ子供の声。

女ＡＢＣＤＥ　「お母さん。」

おしまい。